

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	平成 29 年度
氏名	竹部 栄太	指導教員 (主査)	渡邊 勉

論文題目	ストレッサーが不公平思考を介して抑うつに及ぼす影響 —自己愛を調整変数として—
------	--------------------------------------------

本文概要

【問題と目的】 人生上、人は不幸や災難などに巻き込まれて理不尽な経験をすることがある。そして、こうした経験から「なぜ私だけが不幸なのか」といった認知が生じる場合がある (河合, 2014)。本研究では、このネガティブな認知を不公平思考と命名し、「自らのネガティブなことに対して疑問を抱き、それが自らに限って起こっているという思考」と定義した。不公平思考について書かれた書物から、不公平思考が自己憐憫の一面であること (林田・佐藤, 2009)、抑うつ症状の1つであること (丹野・坂本, 2001)、ネガティブな自動思考の一種である (大野, 2010) と考えられる。また、現実的に見て、「自分だけが報われない」という事象は確率的にほとんど起こらないことから (大野, 2012)、不公平思考が推論の誤りの可能性がある。さらに、不公平思考の規定因として、ストレスイベントの他に、「自分を特別だと思うこと」があげられる (加藤, 2003 ; 和田, 2016)。本研究では「自分を特別だと思うこと」に近い既存の心理変数は誇大性自己愛と考えた。本研究の目的は、不公平思考尺度の開発と因果モデルの検討である。因果モデルの仮説は「誇大性自己愛の低得点者よりも高得点者のほうが、ストレッサーから不公平思考に及ぼす影響は大きく、不公平思考を介して抑うつに至る」とした。さらに評価過敏性自己愛の場合も検討した。**【方法】** **研究 1** 不公平思考尺度の開発 大学生 401 名 (男性 125 名, 女性 276 名) を分析の対象とした。①不公平思考尺度: 31 項目 5 件法。既存尺度 (例えば, 杉浦・丹野, 1998) などを参考にして作成した。②自己憐憫尺度 (林田・佐藤, 2009)、③TES (丹野・坂本・石垣・他, 1998)、**研究 2** 因果モデルの検討 大学生 387 名 (男性 131 名, 女性 256 名) を分析の対象とした。①不公平思考尺度: 研究 1 で作成した。10 項目 5 件法。②評価過敏性 - 誇大性自己愛尺度 (中山・中谷, 2006)、③短縮版大学生用日常生活ストレッサー尺度 (嶋, 1999) ④SDS 日本語版 (福田・小林, 1983) の丹野・坂本 (2001) が構成した SDS を用いた。**【結果と考察】** **研究 1** 不公平思考尺度の床効果のある項目を削除し、因子分析を行った結果、2 因子構造が認められた。第一因子は「不遇な状況」(5 項目, $\alpha=.92$)、第二因子は「自己否定」(5 項目, $\alpha=.89$) と命名した。本尺度の得点分布の歪度は 0.05、尖度は -0.70 であった。また、 t 検定の結果、平均得点の男女差はみられなかった。各尺度間の相関係数を求めた結果、不公平思考と自己憐憫との間は $r=.68$ ($p<.01$)、不公平思考と推論の誤りとの間は $r=.73$ ($p<.01$) であり、いずれも予測を支持する結果であった。**研究 2** 第一に、独立変数をストレッサー、媒介変数を不公平思考、従属変数を抑うつとする媒介分析を行った。その結果、間接効果は有意であった (95%CI [.04, .10])。この結果から、ストレッサーが不公平思考を介して抑うつに至ることが示唆された。すなわち、不公平思考を軽減させる介入を行うことで、抑うつの予防や改善につながると考えられる。第二に、評価過敏性自己愛を調整変数とする調整媒介分析を行った。その結果、ストレッサーから不公平思考へのパスの交互作用が有意な負の係数であった ($\beta=-.08$, $p<.05$)。しかし、評価過敏性自己愛から不公平思考への主効果は有意な正の係数であったため ($\beta=.44$, $p<.01$)、評価過敏性自己愛が不公平思考へ影響を及ぼしていると解釈できる。第三に、誇大性自己愛を調整変数とする調整媒介分析を行った。その結果、ストレッサーから不公平思考へのパスについては、誇大性自己愛とストレッサーの交互作用が有意な係数ではなかった。また、誇大性自己愛が不公平思考へ及ぼす主効果は認められなかった。この結果から、誇大性自己愛が不公平思考の規定因ではないことが示され、仮説は支持されなかった。